

樺 太

豊かな町ふるさと知取

福島県 高橋 京子

(旧・波田野)

日本とロシアの国境近く、元泊と敷香（ポロナイスク）の中間あたりに、知取（マカロフ）はある。石炭とバルブの町である。バルブ工場は、王子製紙株式会社であった。東洋一の貯木場を持つ大規模な工場であったと聞いている。ここは以前、富士製紙と合併して出来たとも聞いている。この会社の社員の住宅地があり、商店街、漁民、炭鉱に働く人々など、約二万人の人口を有していた。

知取川が、悠々と東海岸に注ぎ込んでいた。この大河は、幅二百メートル余り、広い所では四百メートルを越えたという。河口近くは浅瀬だった。この河は、町を形作るのに大変重要な要因であったろうと思われる。この河の上流には、すばらしい森林地帯があつて、バルブの原料は、この河を下って工場まで運び込まれた。又石炭も採れた。河口近くの港には、石炭とバルブとメチルアルコールの倉庫が立ち並んでいた。（メチルアルコールはバルブ精製途中で出来るものである。）出来たものは、この港から船で送り出された。

駅から市街地を通り徐々に上りになって、次第に高台に向かう住宅地が多かった。美しい街並であつたと記憶している。

私の父も王子製紙の社員であつた。陽が沈まず、夜

の九時・十時までも明るい季節には、休日や会社からの帰宅後に、山や海へ遊びに出かけた。戦争の状況が、まだそれほど厳しくないころには、防波堤の上で、よく釣をした。半日も一日もいすわり続ける。時々波しぶきを受けたりする。幼かった私は、父の側で糸の先をじっと見ている。キラキラ光る波間に魚かなと思う影が無数に見えたりする。忙しく竿が動く、かと思うと、ずい分長い間じっと待っていたりする。「いつか、いつか」と思いつつ浮きを見つめ続ける緊張感がいいのだろうか、ある日、父は、私の分の竿も持って出かけた。私が自分でやってみたいと言ったのか、あるいは、こんな時間は、いつ、ふと無くなってしまいかも知れない、一回一回が終わりかも知れないと言う危機感が父にあったのかも知れない。その私の竿で「きゅうり」と呼ばれる魚を十匹ほどもつり上げてとてもうれしかった。この「きゅうり」は愉快な魚で、生臭いと言うよりは、野菜のきゅうりの匂いがする。今は逆に、畑のきゅうりの香りを生臭いと思えて、幼い日の海を思い出す。

河には鱒が上って来た。鱒は銀色に光りながら群をなして河を上るのでシーズンになると河は黒々として、一種独特な力を感じさせる。河の水が、パチパチとはね上る岸に、金だらけを出しておくと、子持ちの大きな鱒がいつの間に入っていたりする。入ったと思うと、ピンピンとはねて、又すぐに河に戻ってしまう。

春夏秋冬

一年の七・八か月は冬の北国である。残りの五か月は、短い春夏秋冬なのだ。だから、冬の生活が、子どもには、一番充実した楽しい思い出の季節である。そして、それだから又、雪どけの春は、心躍る喜びの季節である。きしきしと厳寒の季節が来る。家の戸も壁も、すべて二重・三重になっているので、家の中には木枯らしも伝わって来ない。部屋の真ん中に背の高いストーブが燃えている。このストーブの火は冬中絶やさない。夜中でも昼でも、カッカといっている。幼い私の背よりも、ずっと高いストーブで、父母がストーブの上の口を開けて石炭を放り込む、デレッキで、ガチャガチャとつつきながら、もうこれ以上は入らない

ところまでつめ込む、しばらくするとストーブは真ッ赤になって、家中がぽっかりと暖まってくる。ストーブはほとんどがいくつかの「孫」と呼ぶ棚のような便利な出っぱりを持っていて、ナベやヤカンなどが同時にかけられる。時には大きな金だらいを乗せて、その中にタラバカニの、一メートルもあるのを足をちぢめて入れ、木ふたをかぶせ上に漬物石を乗せてポイルする。このカニの美味なこと。冬の一番の楽しみは何と言っても、橋を作ってもらふこと。父や兄の作る箱ぞりは、乳児の妹を毛布でくるみ湯タンポを入れると、子守りをしながら遊べるように出来ていた。時には近所の樺太犬がそりを引いてくれる時もある。初冬から寒には、すごい「しばれ」で、うっかり素手でドアのノブに触れたりすれば、皮膚がはがれるまで吸いついてしまう。目だけ出している毛皮の防寒帽の目のまわりや鼻のあたりには吐く息の水滴で小さなツララがぶらさがる。だんだん春近くなるとボタ雪が降り、朝起きると、家はすっぱり雪の下、二階の窓を開けて出入口を作るようなことは日常茶飯事である。正月につく

モチは凍らせて保存する。解凍すれば、つきたてになる。気温が零下二十度三十度、少し寒ければ四十度ということもある。外で遊ぶ時「おしっこは外でやってはだめよ」と母が注意する。けれども遊びすぎて家までは持ちこたえられず、雪山の陰あたりでやっってしまう。男の子が立小便をするとう地上につくまでに十センチほどの氷の棒となって、カランカランと音立てて落ちる。

六月ごろには一気に春が訪れる。表面だけ氷の解けた畑に、ジャガイモを蒔く。深く掘り過ぎると、氷になつてしまう。一斉に咲き乱れる野の花は、あつという間に丈が伸びる。一日に十センチも伸びると聞いた自然は、自分にあたえられた時の短さを知っているのだ。すずらんも、フレッブも、あつという間に咲いて、実になり夏は終わる。わずかな日曜菜園のジャガイモを掘り出すともう短い秋。そして冬の訪れ。

戦いへ

以前には何でも手に入った町の店には、次第に品物が無くなつていった。配給も大変な状況になつていた

ようだ。そのころ隣組の人たちはリヤカーで海水を運んでいた。大きなミノガマで煮て乾燥させ塩を作っていた。

毛皮の防寒帽ではなく、防空ずきんをかぶる夏が来た。すぐ近くのクラブと呼ぶ集会所に兵隊さんたちがたくさん駐留するようになっていた。穏やかな時には、時々遊びに行った。子供たちは戦争の恐ろしさもよく分からず、兵隊さんはあこがれのようなところがあつた。顔なじみになると、友だちや妹と訪問するのを待っていて、歌を歌ってくれたり、膝にのせてお話をしてくれるおじさんもいた。家族のことを思いだしていたのであろうと思う。しかし、この兵隊さんたちも長くはここにいなかった。戦火が激しくなると、もう誰も来なかった。

皆で防空壕を掘った。穴の屋根を土で覆い、さらに草を根までつけて三十センチ四方ほどに掘りとりて覆う。防空壕と判別しがたくするためだ。今は小さな子どもでも遊びではなく、リヤカーを押して手伝った。家々の前に防空壕の小山が出来、その上には草が日々

伸びる。近所のお父さんお兄さんたちは次々に出兵して行った。私の父は工場の事故で右足大腿骨を骨折して以来、少し足を引いていたため出兵することはない。毎日会社に出勤した。女たちは街角で煙幕をはった。

空襲に備えて地上の標的が見えないようにするためである。短い夏、冬のための食物を蓄える間もなく厳しい戦いに突入していた。そのころ、空中戦で傷ついた飛行機だろうが、いく機もが山中に落ち煙となったのを見た。空襲警報が鳴って度々防空壕に避難しなければならなくなった。庭のわずかばかりの野菜も、種も蒔けず、飼っていたウサギやニワトリも今はもういなかった。そればかりではなく、ウサギ小屋もニワトリ小尾も煙幕のために提供していた。襖や唐紙、畳すらも煙幕のために持ち出した。町中の人々が眼を赤くしてうつむいて歩いた。いがらっぽい空気がいつも町中に流れ、空に太陽を見ることが出来なかった。

絵日傘

知取神社の前を通る度に、人々は皆手を合わせて深々と頭をさげた。けれども、その夏祭りも今はなく、

祭りでも買ってもらった絵日傘がたった一つの宝になった。母は押入れをすっかり整理して最後に必要な物を残したほかは、煙幕のために街角に持ち出していた。

箱に収められたおひなさまも、おもちゃの人形も、兄や姉の本も全て持ち出して煙幕にしていた。家の中には、仕切りの戸も、あちこち無く、戸棚の引き出しもなくなっていた。ある日、タンスの引き出しが引き出された。そこには私の宝物の絵日傘がたった一本入っていた。私が最後まで激しく抵抗して守り続けた絵日傘。それを煙にするのに我慢が出来ず、大声でわめき散らし、母はあきらめた。

煙幕はりの大人の仕事をのぞいていた私は、くすぶらせている灰の中に、半分形無く、所々にまだ白い傘の骨を見つけた。はっとして家に帰って探したが、もうどこにもあの絵日傘は見あたらなかった。たった一つのすてきなものの。最後に残された楽しいものは、もうむしり取られてしまったのだ。だれでもない家の中で、言いようのない悲しみが私を包んだ。私にも状況は分かっていた。母を恨むことも出来ず、大声で泣

くことも出来ない。シーンとした家の中で、そこだけ残っている押入れの戸を開け、せんべい布団にもぐり込んだ。顔を押しあて、長い長い間泣いた。その夕方まで家内中が私を探した。もう暗くなってから泣き疲れて眠ってしまった私を見つけた。

兄のこと

兄は国鉄に勤務していた。カマタきになることが夢だった兄は、りっぱな木箱に入っている精巧な鉄道の模型を持っていて、休みには自分の部屋いっぱい、この模型が広げられ転車台、踏み切りの遮断機や手旗などまでそろっていた。時速とか車種とか小さな私に説明してくれた。その真剣な態度と輝く目つきに、聞く私も何かしら誇らしさを感じていた。「決して触れない」約束で廊下で正座して、それを見学した。この兄は戦争が激しくなると、大変危険な勤務を強いられることになったようだ。二日間の食糧を持って出かけても何日後に帰れるかわからない。母は乏しい食糧の中から最大のものを準備して持たせた。それでも悲しいことに、とても少しだった。ひどい吹雪が続く、三

日も四日も過ぎて兄は帰らない。空襲にでも遭ったのか、雪崩にでも巻き込まれたのかと、家中で心配しても、一向にははっきりした情報は手に入らないのだ。母はなけなしの米びつをたたいて、ひとにぎりの粥を炊く。トントンと地吹雪の戸を叩く音でも戸を開けて見る。そして粥を温める。今か今かと粥を温め温めしているうちにノリようになってしまふ。ある時、玄関が開くとどっと兄が倒れ込んだ。べちゃんこのリュックを背負って、もう死んでいるのかと思われるほどになっていた。母はかけ寄るとすぐ茶の間に引きずり込んで、パンパンと頬を叩く。どうしても起こしておかねばならないのだ。このまま眠り込めば再び目ざめることはないかも知れない。母はすぐに、ノリのようになった粥を兄の口に流し込み、やっと布団の中に休ませる。手足をマッサージして、部屋を暖める、家中が緊張した雰囲気、時々顔をのぞきに行く。スウスウと寝息をたてているとホッとす。一日二十四時間ほとんど寝かされたままの姿勢で寝ている。寝返りをしただすと、やっと家中の緊張がやわらいで来る。兄が目覚

めて初めて実情が明らかになるのだ。兄の勤務の厳しさは、終戦後も続いた。そして、もう内地に引揚げられるだろうと言うころには、栄養失調になり、その上結核に侵されて、内地に引揚げ後再び健康になることなく、二十歳半ばにして亡くなった。

敗戦に向かう日日

母の着物は、食糧と引き替え、ほとんど無くなっていた。けれども寒い冬を越すためには、どうしても暖かい洋服が必要だった。子どもたちは、食べ物も乏しく成長も遅かったが背丈だけはひょろひょろと伸びて行つた。大人の衣類や小さくなった衣類を作り直しては着せた。セーターも編み直した。五歳の私も自分のくつ下は、自分で編んだ。洋服をほどこす時は一寸ずつはどいて、糸は切らないようにし、その糸を使って作り直すのである。夜は小さな豆電球が一つ、窓という窓に暗幕を引いて、光がもれないようにする。その小さな光の中で眠る時間を惜しんで母は働いた。

夏の間にアカザ・はこべ・オオバコ・野草も毒でないものはすべて摘んで、冬のために貯えた。それでも、

ほんの少しだった。食糧もなく、部屋の間仕切りもなく、畳すらもなくて、この冬を越せるのだろうか。空襲よりも冬の寒さを父母は怖いと思っただろう。それは長い冬だった。

昭和二十年の春、樺太の食糧は底をついていたのだと思う。米ばかりか、ヒエもアワも、じゃがいもほんのたまにしか手に入らなかった。三日も四日も防空壕に入り、ちょっとした間に家から必要な物を壕の中に運び込んだり用をたしたりする。防空壕には水がわいて、だんだん溜ってくる。春は雪どけ水が地下水を増やすので、壕の中の水も増すばかり隣の壕は、膝上まで水が溜ったので使用不能となった。幾時間もガラガラ、ゴーゴーと物凄いい音が響いて戦車が通っていった。空箱と空箱の間に板を渡して子どもたちは、そこに乗った。だが大人たちは膝まで水につかっていた。隣の壕の人たちも来て、四畳ほどの壕は満員、入口のふちはほとんど開けられている。B29の襲来でふたを閉めると中は真っ暗、バラバラと土がくずれ落ちたりする。このまま、土の上に出られないのではないかと不

安で泣き出したくなるのを、じっと我慢して、ただ息を潜める時間が長い。

夜、家に帰った。父母がもう防空壕には入らないと言うのを聞いた夜、港は艦砲射撃を受けた。窓ガラスはバリバリとふるえ所々はび割れた。すごい轟音と共に港に立ち並ぶ倉庫が火を噴いた。しばらくは爆発音が町中に響き渡り、天空幾十メートルも高く火の粉が舞い上がった。市街地にはドラム缶が、ガラガラと飛んで来てころがった。二階の窓から見てもいいと母は言った。姉と二人で、歯の根も合わないほどにガクガクふるえながらそれを見ていた。「もう防空壕に入らない」と言った父母の言葉の意味もわからず、「あー、よかった」と思ったものだ。壕は、もう作り直さなければならぬほどに傷んでいたし壕の中で死ぬようなことがあれば、それよりは家の中で死ぬ方がまだましだと父母は悲壮な覚悟をしたのではなからうか。港の倉庫は、一週間も十日も燃え続け、夜は街の空が赤くゆらゆらとゆれた。

終戦

その日は朝から、不気味に静かで何かしらエアポケットにでも落ちこんだような日だった。隣組長さんの家に皆集まった。ラジオがピーピー、ガーガーと言っていた。だれ一人話もせず、何やら不安げな緊張がはりつめていた。天皇の声がとぎれとぎれに大きくなったり小さくなったりして流れた。大人のすすり泣きの間で何やら重大な事態になったらしいことを感じて、子どもたちも身じろぎもしなかった。

私たちに大地はなく

この日から最も恐ろしい日々が始まった。終戦と同じ時にロシア兵の略奪が始まった。昼も家のカギを閉め、カーテンを引いてとじこもった。時々発砲する音が聞こえて来た。わずかに隣近所からの情報によって「どこそここの家では皆殺しにされた」「○○さんの家ではロシア兵が押し込んで発砲しケガをした」「○○さんの家では家中の物を略奪された」と毎日のように伝えられる。夜もひっそりと、家族寄りそって暗い中でうつらうつらと眠るような日々だった。どのぐらい過ぎたろう。私には時間的な長さが定かではない。引き揚げ

が始まった。ロシアの一般市民も、雪崩のように入って来た。日本人にとっては、どこも安全ではなかった。いろいろなデマが飛び交い信じられるものが何なのかわからなかった。危険だらけの街で「ストーイ」と呼びかけられるのが一番恐ろしかった。背中に銃口がつきつけられている場合も多かったからだと言う。終戦の次の日、隣家の私の一つ年上の男の子が、大声で泣きながら帰って来た。どうしたのかと近所の大人たちがかけ寄って聞くと、「お母さんが、ロシア兵につれて行かれてしまった」と言う。ジャガイモ畑に、イモ掘りに出かけた。イモを掘って帰りかけると「ストーイ」と呼びとめられて、お母さんは連行され、「お母さん」と泣きさけぶ子どもは帰されたのだ。もちろん昨日までは、まぎれもなく自分の畑だったのだ。しかし今日はもうそれはロシアのもの、取れば「泥棒」であつた。

今までは、苦しい恐ろしい戦時中であっても足元の大地は、自分たちのものであつた。河も岸边に打ち上げられた魚や海草も、野に生えている草花もすべてが

日本のものであった。しかし今はちがう。すべてはロシアのもの。ロシア人のもの、住んでいる家も日本人の命さえも、何の保障もなく、たとえ傷つけられても、どこに訴えるすべもなかった。浮き草の上で大海を漂流しているような恐怖が日本人を襲っていた。母を連れ去られた隣家の子どもたちは、食べる物など入っていないようなゴミ箱をあさって歩いた。台所の窓越しにその光景の見える母は、「何か、あげるものが、あったらいいのにねえ」と涙をふくのを見、外をのぞこうとする私を叱りつけた。この家族は母をシベリアに連れ去られたまま引揚げになった。

身近な人の引揚げの時、駅まで見送りに出かけた。駅前には人がぎっしりつめかけていて、「こんなに日本人がいたのか」と驚いた。汽車は出、帰り足になっても、駅前広場の街灯の柱の下には、寄り添ったり、ぐったりして死んでいるのではないかと思われる人が何とたくさんいたことか。うずくまったり泣きわめいている子どももいた。何か悲しい恐ろしい場所だった。皆引揚げ命令を待った。引揚げ者の名前のはり出し

を見に行つては、父母は肩を落として帰宅した。母も家族分のリュックに、わずかばかりの荷物を詰め込んで引揚げの準備をした。私のリュックには亡くなった長兄の位牌と着替え、記念の写真が数枚入っていた。途中離ればなれになるようなことがあったら困るとリュックのふたの裏には、名前や家族名や内地の頼り先などを書き記した布を縫いつけてあった。

しかし我が家に引揚げ命令は下りず月日が過ぎた。父は工場の引き継ぎのため毎日出勤していた。ロシア人の一般市民が住みついて生活しだすと、次第に落ちついてはきたがしばらくは略奪や強盗の開口一番の「ストーリー」(止まれ!)をどんなに恐れたことか。同じ人間の発する言葉を恐れなければいけない信じてはいけない。そして殺されなければいけない。殺さなければならぬ。これが戦争なのだ。終戦後になって戦争の姿は、ますます明らかに見えるようになったのだ。

ロシア人との生活

我が家の両隣にロシア人が住み、我が家の半分にもロシア人夫婦が住み込んだ。近所の日本人は、次第に

引揚げて少なくなった。ロシア人と一番早く友達になったのは、私たち子どもだった。大人も親しくなってきたと、状況はやや安定し、気分もずっと明るくなった。けれども、大人は毎日食糧を手に入れるための戦いだった。ほんの少しのパンが売り出されていた。朝未明には、父が行列に出かけ、姉はまだ五、六年生の年令であったが、その後を交替し、朝が明けて母が並び継いでやっと一にぎりのパンを買う。こんなに並んでも、数人手前でパンは無くなり、何も買えない日もある。こんな生活がずっと続いた。

学校が始まった。午前と午後の二部制で、午前中はロシア人、午後は日本人の学校だった。私は終戦の次の年、就学年令に達していた。楽しみだった学校に行けて本当にうれしかった。学校では、日本人の先生と生徒に会えた。門山先生が担任で、真剣な授業の雰囲気がか今でも耳もとに感じられる。この学校は知取第一国民学校という。

ある日、授業の最中に火事になった。火は講堂から出た。足早に人が来て教室の前の入口で先生に何かさ

さやいた。すぐ廊下に出て二列に並び避難した。今考えると、おかしいのだが、きちんと並んで走った。赤い炎がすごい勢いで生き物のように天井をはって、後から追いかけて来るのが見えた。ガタガタ震えながら道を横切って角の郵便局前に避難した。先生が出席簿で名前を呼び確認している間に次々と父母が駆けつけた。私は迎えに来た父の後をついて歩きながら、その背中が本当に大きく見えた。軍足のひもが、ほどけて地に引きずっているのを見つけると急に、厳格な父が暖かく見えてほっとしたのを覚えている。そして家にいたら、父の上着のボタンがちぐはぐに掛けられてあって、家中で安心したのも手伝って大笑いになった。この火事は、ロシア人の生徒が講堂の屋根裏で火遊びをしたのが原因であると言われた。先生たちや生徒もかなり引揚げたこともあって、この後すぐに日本人の学校は閉められたと記憶する。

ロシア人も日本人も皆生活は苦しく、食糧を得るための戦いは続けられた。毎日、古いセーターを丹念に解いては、赤ちゃんのかわいいくつ下や帽子に編み上

げる。姉はまだ十一、二歳の年だったと思うが、その編物の上手なこと、かならず一夜で何かしら仕上げてしまう。ふんわりと編んだ品物を次の朝バザールに持って行く。売れたお金でパンを買うのだ。姉は母の強力な片腕だった。母も姉も出かけて小さな妹と二人で留守番をしていた。早く帰って来ないかな、と待つことばかりに氣をとられている間に、廊下から忍び込んだ泥棒に、便所と茶の間の電球と置時計を盗まれてしまった。電球はなかなか手に入らず、高く売れる物だった。暗い中で過ごしながらも編物をする姉と母は無言でとても悲しかった。次の日バザールに近くに住む男の子が、電球と時計とを出しているのを見つけたが、現行犯でなければ返してはもらえないのだった。バザールには一度だけ、連れて行ってもらった。何から何まで並んでいた。皆一つ二つの物をかかえて売っていた。小さな子どもから、荒くれた男たち、老いた女たち、さまざまな人がいて、私には、怖い所のように思えた。

母は床屋の腕を持っていた。それを知った私の友だ

ちのラーヤの家族は、母のもとに散髪に来ては、いろいろな話をして行った。特に絵を描いては言葉を教えあったりして親しくなった。ガーリヤの家にも誕生日のお祝いに呼んでもらった。父と二人で出かけると、カバーを掛けたテーブル、空箱のイス、そしてスープを作っているのは、ブリキの洗面器だったのにはとてもびっくりした。何もないと思った我が家よりも、ガーリヤの家には何もなかった。でもこの家族は五人仲良く暮らしていた。

父や兄はロシア人と共に働いて、日本人であるためにつらくあつかわれたことがあるのかも知れない。が子どもの私は、たくさんのロシア人と仲良く過ごした。土曜日の夜は街の角や広場にダンスの輪が出来たり、メーデーにトラックが来て白パンを配ることなどロシアの習慣にも慣れて来た。

引揚げ

幾度目かの引揚げ、「タイトウ丸が沈んだ」との情報が伝わった。「友だちやその家族も乗っていただろうに」「終わったはずの戦争がまだどこかで続いている」

るんだ」と背すじが寒くなった。それは、私たちも無事に内地に帰れるのだろうか、という不安を掻き立てた。

三年目の春を送った。待ちに待った引揚げ命令が出た。リュックに一つずつ身の回り品を持つ以外は何も持って出られない。前夜、隣のラーヤの父がお別れに来てくれた。家の中には何もなく、ペチャンコの布団と柱時計が一つ、板の上で何となく落ちつかない夜を過ごした。

引揚げ列車は貨車で、家畜を乗せるような車の真ん中ほどに左右に引き戸があつて、昼間は戸を開けハシゴを横にして柵にしてあつた。皆正座するほどのスペースしかない満員列車で、ガタゴトと頼りなげに走り、山中の名も知れない駅で、幾時間も止まった。二日間も止まったところもある。途中車中で亡くなった人もいて、停車中に穴を掘って弔いをした人々もいた。もうすぐ内地に帰れるという時に、さぞ無念だったろうと思う。

真岡についた。この港から引揚げ船が出る。真岡は坂

の多い町だった。引揚者のテントは高台のグラウンドに立っていて、一面には海が、片方には街が見おろせた。大きなテントが幾張りも建てられており、テントの中には板の上にシートが敷かれてあつた。ここに滞在している間は雨の日が多く、テントの中はいつもじめじめして、夜は寒かった。

このテントを出て、少しカーブした坂を下って行くと坂の途中あたりに兵隊さんたちが、大きな釜に雑炊を作っていた。長いひしゃくでかき混ぜている。食事時は、ここに行列して、一碗ずつをもらう。その横を少し下りると、便所が作られている。深い深い穴に板を渡してある。板には穴がくりぬいてあるばかりで、とても怖かった。

一週間ほどもしたころ、突然乗船の日が来た。船底も満員でこの二日間もつらかったが、もうすぐ内地に帰れる安堵感とこれからの不安とでいっぱいだった。私の家も長姉は内地に留学したまま終戦。離ればなれになっていて消息もはつきりしなかったし、兄も重病で、いっとうなるか心配だった。函館について、たく

さんの注射や検査を受けた。この検査でいろいろな物を無くした。記念の写真も取られてしまった。最小限の物の中から又取られてしまったので父母は「せっかく内地まで来て、今度は安心と思ったのに、又取られてしまふなんて」と落胆した。

一時の落ちつき先は山形市だった。車中は長かった。混んでいたが暖かな雰囲気だった。母の言葉がきゅっと胸にしみた。

「田んぼ、あれが田んぼ」車窓からは、田園風景が青々と広がっていた。私の小さな時から忘れまいとするかのように、桜の季節には桜のこと、実りの季節には首うなだれる稲穂のことをいつも話してくれた。目の前には、その景色が後から後から広がって来る。「引揚げですか」声をかけたおばさんがいた。耕のもんに手ぬぐいのほおかむり、母が「樺太から」と答え、いろいろな話が始まった。おばさんは膝の上の風呂敷包みを広げ、中からゴマをまぶしたオニギリを私と妹にくれた。「ごはんって、こんなにおいしいものか」と言う妹は、物心ついて初めて食べたごはんだった。

た。母の目から涙がこぼれた。「あゝ、内地に帰ってこれたんだ」と希望が胸いっぱいになり、オニギリのゴマの香りが体中に広がっていった。

【執筆者の横顔】

京子さんは樺太生まれ、日本が敗戦した昭和二十年八月十五日の時は、五歳の幼児だったのである。

北国の春は遅く短く、夏かと思う間に秋風が吹くといった調子、その間に六、七月ごろ、花という花は一齐に咲くのである。そして冬だけが長い長い酷寒が続くので、従って戸、窓は二重三重でストーブの火は二十四時間燃え続けて温暖を絶やさない。冬は楽しく過ごせるように家庭の内外ともだんらんを配慮していた北国のくらしである。

京子さんの兄は国鉄に勤務して一家の支柱である。

悲しいかな、八月十五日天皇陛下の玉音を拝聴して日本人はみな号泣して悲憤やる方なかった。間もなくソ連軍は樺太全域に侵攻して略奪、暴行、殺傷まで引きおこし人間社会から動物社会になってしまった。

樺太では食料不足で日本人はみな栄養失調、病気になるもの多く、お互いに助け合う力なく、我一人だけ生きる利己主義な考えに落ちていた。京子さんの隣家で耕作している畑の中から収穫物をとっていると、ソ連人がきて泥棒とよんで撃退するのだった。

パン買いは行列に並んで買うのだが、その金もなくなる。京子さんの姉は十一歳なのに一晚のうちに必ず手袋か、靴下か、チョッキか一つを仕上げて、それを売って母の食料買いを手伝っていたのは忘れられない。

引揚げ命令をうけても全く小羊の群のごとく何の力もなく乞食姿である。樺太から引揚げ途中、汽車の中で、たしか山形あたりであるお婆さんがニギリメシをくれたので、母が声を立てて泣いたのは忘れられない。幼いころから、母思い、姉思いの深かった京子さんは、現在幸せな日々を送っている。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助